

子どもたちに多様な活動の場を：

―滋賀発ダイバーシティ計画

滋賀県●特定非営利活動法人 NPO子どもネットワークセンター天気村

琵琶湖の南端に位置する滋賀県草津市は、東海道と中仙道が合流する昔から交通の要だった。今は大阪・京都のベッドタウンとなっており、都市化の波のなかで自然は急速に失われた。マンションが建ち並ぶようになったこの街で、遊び場をなくした子どもたちに、草津の自然をおもいっきり味わわせてあげたいとユニークな保育を実践し、ほかにもさまざまな幅広い活動を展開している特定非営利活動法人NPO子どもネットワークセンター天気村(以下、天気村)代表理事の山田貴子さん(54)に話を聞いた。

子どもたちがのびのび育つには ―天気村の生い立ち

山田さんは、子どもたち一人ひとりがもっている夢や希望をかなえて、個性を伸ばしたいという考えをもって中学校の教師をしていたが、偏差値という数字で振り分けられていくことに次第に耐えられなくなっていく。また、折から、いじめや子どもの自殺などが社会

問題化するなかで、弱い立場の子どもたちを何とか支えてあげることができないものかと思った。しかし、そんな仕事はどこにもなかったため、自分でつくるしかない一念発起。教師生活に終止符を打つことにした。

公民館などの公共のスペースには子連れの母親が自由に出入りできる雰囲気がない。山田さんがほしかったのは、母親同士が雑談している傍らで、子どもが遊ぶことのできる空間だった。

公民館などの公共のスペースには子連れの母親が自由に出入りできる雰囲気がない。山田さんがほしかったのは、母親同士が雑談している傍らで、子どもが遊ぶことのできる空間だった。

けられる場所があればと、1990年に2〜3歳を対象とした幼児教室「こんべいとう」を始めた。こんべいとうのツノのように、子どもたちがそれぞれ個性を出して育ってほしいというのがネーミングの由来だ。

野外保育の こんべいとう自然保育園

琵琶湖に近い草津市は、かつて子どもたちの生活圏に遊べる自然があふれていたが、都市化がすすむ街のなかから子どもたちが遊べるような自然はどんどんなくなってしまう。

それでも車でちょっと走れば、森と里山、平野、川と湖などが連続している素晴らしい自然の資源がある。これを活かさぬ手はないと、山田さんは自然のなかで子どもたちを遊ばせる野外保育を始めた。大型免許を取得して、子どもたちをバスに乗せ、毎日遠足によ



写真上 古民家のかまどでご飯を炊くこんべいとうクラブの子どもたち
写真下 12種類の琵琶湖の生き物シールが貼られた子どもエココイン

うに出かけては自然のなかで子どもたちと遊んだ。

こんべいとう自然保育園は通常の保育園とは異なり、専業主婦でも預けることが可能で、保育の必要な時にのみ預けられるチケット制の保育園だ。

子どもたちが毎日やることは、いくらでもあった。田植え、山登り、川遊び、魚釣り、陶器づくり、薪割り。特別養護老人ホームで入

居者と子どもたちが交流することもある。あらかじめ予定を決める

ことなくその日の天候や登園した子どもの人数や状態を見て出かける先と活動を決める。山田さんの頭の中には、草津市周辺の季節ごとの自然がどうなっているのか、どこに行けば何ができているのかという情報がいっぱい詰まっている。

野外に行つてけがをすることもある。けがをした子は、家に帰つ

て自分の言葉で体験を母親に語る。

そうやって子どもが自分のことを語れるように育っていくことの素晴らしさを保護者も理解してくれる。多少のリスクはあっても子どもを預ける関係性を築いてきた保護者がいて、こんべいとうは続てきた。20年の間に1500人を超える子どもたちを送り出している。

NPO法人化と 天気村の活動の広がり

子どもを主体としたイベントや野外活動が増え、天気村で地域のさまざまな立場の人々が出会い集まるようになった。そうした人たちがつながってできた輪は徐々に広がっていった。

地域で子どもの教育を考えていくとする時、その地域の、ひと・まち・環境に、より深く取り組んでいくことが必要だと考えた山田さんは、1994年、「特定非営利活動法人NPO子どもネットワ

ークセンター「天気村」を設立した。

NPO法人化し、活動の幅を広げたことを機に、協力者やボランティアの数も増え、今では委託事業での雇用を含めると常勤25人となっている。各事業(図)への参加者は年間で2万5000人に達する規模だ。

地域と関わって子どもを育てる

山田さんは、まちづくりや地域の環境を考える時に、子どもにも楽しめる方法を考えて子育て層に向けて訴えた。例えば「商店街つておもしろいところ」と子どもが思えるようになればと提案したのがエココインだ。

アルミのコインに12種類の琵琶湖の生き物シールを貼った「子どもエココイン」を集めると、協賛の商店などから環境グッズがもらえる。エココインは、商店街のイベントに参加したり、子どもがお使いに行くともらえる。商店街の

図 天気村の事業

天気村の自主事業

・こんべいとうクラブ（毎週土曜日、年間40回）

幼児から小学生を対象にした野外体験と四季の伝統的行事体験のイベントを実施。春は田植え、夏は川遊び、秋は芋掘り、冬はしめ縄づくりと、周辺の農家や茶道など伝統文化の協力者の支援のもとに行われている。

・天気村自然体験村・国際交流キャンプ

夏休みなどの長期休暇中に3～4日間で野外体験や地域交流をする。4コースに分かれて延べ150名が参加し、虫採り、パン焼き、川遊びと子どもたちが喜ぶ盛りだくさんのメニューが並ぶ。国際ボランティアや、地元の大学で学ぶインターンシップの学生など、海外からのゲストと交流する機会も設けられている。

等

委託事業

・草津ファミリーサポートセンター

子どもを預かったり、保育園の送迎をする援助会員を募って、依頼会員からの援助の申し込みに応える仕組み。地域の子育て力をアップするための草津市の委託事業として行われている。サポートする援助会員リストは、地域住民の人材バンクにもなっている。

また、2010年度からファミリーサポートセンターの活動の一環として、お出かけサポートセンターがスタート、高齢者や障害のある人の福祉有償運送事業として、通院や送迎、買い物など、5台の車をリースし、毎月200件の利用がある。こちらも、協力を受けたいおねがい会員とドライバー役の協力会員の登録制度がある。

・地域子育て拠点事業「つどいの広場」

市内の0～3歳の子をもつ親子を対象に、子育ての孤立化を防ぐ目的で親子の遊べる場を設ける草津市の委託事業として行っている。草津市の保健センターにプレイルームを設置して、スタッフを派遣、年間244日開所している。ここには、毎日40組前後の親子が来所している。

・ほかに、隣の守山市もりやまの児童クラブ運営も手がけ、2010年6月には、認知症対応型の地域密着型通所介護施設、デイサービスでてるてる元町を始めている。

お祭りでは、屋台でお金の代わりにエココインが使えるようになる。

子どもたちは商店街のおじさんおばさんと話すことで社会との関わりを学ぶ。一方、商店街も、これまで決まったお客さんや商店同士とのつきあいだったところに人里込んできた子どもたちとの出会

いは新鮮だった。「この子たちのために、何かせにゃあかんな」そう考えた店主もいたという。

天気村のスタッフが、今楽しみなから大切にすすめているのが古民家の再生だ。「古民家Nuttoくずとく」と名づけられた建物は、琵琶湖の西岸の山間部に建つ150年前の旅籠だった古民家。これ

を買い入れて、自分たちで少しずつ使えるように改修をすすめている。そこで昔の暮らしを体験しながら、民家の修繕をしていく。こんべいとうクラブの子どもたちが泊りに来ることもある。活動はなるべくその地域にあるものだけを、餅つきや味噌づくりをし、かまどでご飯を炊いたり、菜園を

をつくったりもしている。地元の集落の住民たちも、訪れた子どもたちに昔語りを聞かせてくれ、つながりをつくっている。

子どもたちの育ちを考えていくなかで、こうして天気村は地域や行政と連携しながら街を耕している。

防災の必要性を子育てから学ぶ

また、これまでの子育て支援の視点から、子育て家族世代の幼少体験、特に遊び体験の少なさが、親であれば当然の、自分の子どもの命を守るという親の力が弱まっていると考える。

そこで、天気村では親子が一緒に参加できる防災プログラムとして、「子育て家族防災トレーニング」をつくり、親子の絆を意識させ、日常の子育てから防災の必要性に気づかせるようにしている。

今年度は滋賀県との協働事業により「子育て家族防災トレーニング

「村」には豊かな可能性がある

特定非営利活動法人NPO子どもネットワークセンター天気村代表理事 山田貴子さん
事務局長 辻 充子さん

山田さんは、天気村の活動のなかでたくさんのアイデアを出して事業の幅を広げてきた。お話を聞いていると、理想の教育を求める理念をどうしたら実行に移せるのか、どうしたら子どもたちに伝えることができるのか、いつも頭から離れないように思える。

天気村のような活動を行っていくうえで、問題を未然に防ぐには、先へ先へと考えていくことに尽きるといふ。行政と協働しながらも自分たちで何ができるか、新しい遊びの場や、サークルの可能性はないかを常に探していくことだといふ。

山田さんには「村」にこだわりがある。なぜ村なのかと聞くと、こんな言葉が返ってきた。

「都市には100点の仕事ができる専門家がいます。村には100点の人はいなくても、みんなが50点の水準でいろいろな仕事をこなせるんです。ひとりの人間が家も建てれば、ご飯も炊くし、布も織る。それは50点でいい。私は、そういう「村」のような環境を子どもたちの周りにつくりたかった。天気村は、都市化していくなかで「村」をつくっていく作業だったんです」

事務局長の辻充子さん（55）は、山田さんとは学年は違うが、家も近く学生の頃からの知り合いだった。90年にボランティアで天気村を手伝うようになって、そのまま20年のつきあいとなった。幅広い天気村の事業のすみずみまで気を配って、アイデアウーマンの山田さんをしっかりとサポートしている。この2人の絶妙のコンビプレーが、天気村の背骨となって活動を支えているのだ。



天気村代表理事の山田貴子さん（右）と事務局長の辻充子さん

「些細なことでも個人が社会に参画していけるんです。大きな力がドーンと社会を変えていくのではなくて、「村」の持続可能な力がじわりと変えていくんですよ」といふ山田さんの言葉がなんとも心強く響いた。

「グ」のプログラムをつくり、就学前の子育て世代の親子を対象に、パラシュートバルーンという遊具

を使用して、親子で遊びながら防災について学ぶ取り組みをすすめているところである。

天気村の活動を見渡してみると、**ニーズにあわせた事業展開**

と、大きく事業が広がっているが、今も子どもに特化した取り組みが中心であることに変わりはない。

それぞれの事業は、その時その時で必要だから始めた事業だが、ずっと続けなくてはいけないわけではない。ニーズに合わせてフットワークよく変わっていけばよいというのが山田さんの持論だ。

これから先のことを尋ねてみると「天気村が大きくなるよりも、あちこちの地域で、天気村の役割を果たすところが出てきてほしいですね」と山田さんは語った。

特定非営利活動法人
NPO子どもネットワーク
センター天気村 概要

所在地：滋賀県草津市東草津1-1-15
TEL：077-564-7868
FAX：077-564-7918
ホームページ：
<http://www.diwakone.jp/~ni-tenki/>